

シベリア抑留 昭和二十年十一月一日 ボダラ收容所
舞鶴復員 昭和二十四年七月二十四日 (遠州

丸)

復員後の職業 製材業

(岩手県 田辺 壮久)

白衣の捕虜

岩手県 高橋 三郎

私は「タワリシ」という言葉を「人殺し」と訳すことにしている。何が同志なものか、本当に「同志」ならそれなりの扱いがあつていいはずだと常に思い続けて、五十数年が過ぎ去った。

私はソ連軍がソ満国境を越えて満州になだれ込んだとき、新京の陸軍病院で病床に横たわる身であった。「結核」、当時今の癌ほど恐れられ不治の病といわれていた「結核」で、畳一枚ほどの段差もままならないほど衰弱しきった身体であった。そんな私達が白衣のま

まソ連に連行され、三年余り強制労働に従事して生還、七十数歳の今日まで生きていますということは、本当に自分でも信じられないことなのである。

ソ連軍侵攻の報に陸軍病院側は直ちに退避の命令を出し、有蓋貨車に、病室ほどではないが、ある程度の設備を設けて病兵を乗せ、釜山目指して出発した。

途中、満人の駅員に難癖つけられて列車が立ち往生し、そのたんびに持ち合わせの食料や衣類を差し出して通過させてもらい、何とか三十八度線までたどり着いたのは昭和二十年八月二十五日頃のことであった。

そこでソ連軍にストップをかけられ、そのまま平壤まで後退、学校のようなところに收容された。言いが振るっている。「貴方達は病人であるから、ソ連軍は人道的立場から貴方達を精密に検査診断をして療養させなければならぬ。現在日本の国は敗戦により食物も着る物も建物も不足していて、貴方達が今帰ったとしても何の治療も受けられないばかりか全員餓死するよりはかないだろう。日本の国がいま少し落ち着くのを待つて直ちに送還いたしましょう」

長いことソ連にいるうちに、こういったソ連流欺瞞のシステムはわかってきたけれども、そのときのわれわれはその言葉を信ずるよりなかったし、実際信じて平壤の施設で暮らすこととなった。新京を出るに当たって食料、衣類等必需品は相当列車に積んであったから、当面の生活はさして困ったこともなく、平穩な日々で三カ月近く経過した。

十二月初め「東京ダモイ」の命が下った。私達はまた持てるだけの物を持って列車で移動、日本海側の港町興南に着いた。「おお、あの船がわれわれを内地に帰す船なんだ」。これが地獄行きの出発になるとも知らないで、私達は胸弾ませてその船を見入ったものである。

船は一万トンもあろうかと思う油槽船で、油を積むためのどでかいタンクが無数にあり（いわば物すごく大きく深いドラム缶）、われわれはそのタンクの中で生活することとなった。下は鉄のパイプが敷きつめられており、冷たいし、ゴロゴロして痛くて寝られない。しゃがんだり腰をおろしたり立ったり、来る日も

来る日もそういう生活になった。船底だからエンジン音はやかましいし、夜は薄氷が張るほど寒い。

日中になると人いきれて天井に張りついた蒸気がポタポタ落ちて衣服はグショグショになる。寒いからトイレが近くなるけれども、そこを出て甲板にある便所へ行くのに二十メートルほどの垂直にかかっている鉄の梯子を昇り降りしなければならない。三百人も入っているのだからその梯子は二十四時間いつも満員で長い列が出来ている。もう我慢が出来なくなった者がその場で大小構わず用足しするものだから、これまた何ともやりきれないのである。しかし、あの密閉したような缶の中にいて窒息しなかったのは、どこかに換気があったのだらうと思うが、そのことは今もってわからない。

私は頭から小便かけられて全く辟易したことがある。遠慮しているといつ甲板に出られるかわからないので、私も皆と一緒に梯子にぶら下がった。鈴なりという言葉そっくりにその鉄の梯子にぎっしり人がぶら下がっているのである。この梯子は整備とか修理をす

る人がたまに昇り降りするためのものだったと思うし、そんなに頑丈な作りでなかったと思うが、あれだけの人がぶら下がってよく落ちなかったものだ。

高所恐怖症の私が二十メートルもの梯子につかまっているなんて、全く死に物狂いで昇り降りした。半分以上昇ったとき、私の上の連中が突然騒ぎ出して身体を右、左とよける。「おい、小便じゃねえか。小便臭いぞ」。たまりかねて小便をおもらしした奴がおり、それがポタポタと頭に落ちてくる。今のようにつれてはいかなかったけれども、頭から小便かけられたのは後にも先にもこのときだけである。

船に乗る前にこんなことを言った戦友がいた。「さすがにソ連は大国だよな。こんな立派な病院船でわれわれを内地に返すんだから」。何が病院船なものか。油槽船、今というタンカーなのだから、全く聞いてあげられる。しかも興南を出発する前に「この船は大きい船ですので、貴方達二千人乗せただけでは軽すぎて転覆する恐れがあります。したがって船底にレンガを積んで行きますから協力してください」と言われ、われ

われは本気にしてそのレンガの積み込みのため一所懸命働いたものだ。これも真っ赤な嘘で、ソ連は満州侵攻以来、あらゆる物資、あるところでは住宅の畳のようになく取るに足らないものまで汽車や船を使ってシベリアに運び去っていた。昭和二十年も末の頃になればもう略奪する物がなくなって、レンガにまで手をのばしたのであろう。

持ち物は全部甲板に置いてるのだから、甲板にいてもいいようなものだが、十二月の日本海は寒くて到底甲板になんかいられたものではない。いつの間にか泥棒が横行して、泥棒が泥棒にあい、これまた大騒ぎになったものだ。それでもそんな寒い甲板にじっと我慢して周囲を見回している人が何人かいた。彼ら曰く「この船は内地には向かってないぞ。船の左手に陸地がずっと続いているんだ。海の真ん中に出なきや日本に帰れるはずがないんだ」、船乗りだという兵隊がそう言う。うん、そういえば船の進行方向左手にうすぼんやり陸地らしきものが見える。われわれの不安は一気に現実となって、砕氷船が先導してウラジオストク

クの港へと入って行った。それでもまだこんな病人の集団をシベリア送りにするなんて信じ難く、「一時寄港して水や食料の補給のためでないのか」などと、淡い楽観論も飛び出したりしていた。

しかし、ウラジオストックに上陸させられるや、地獄のような死の雪中行軍がソ連兵の監視の下に始まった。人間、環境が変わりそして死が目前に迫って来ると「あの人がこんなになるのか」と思うほど別人のようになるものである。この集団からはぐれたり落伍したりすれば、この雪の零下三十度の中で凍え死ぬよりないとなれば、病兵の集まりでも必死になって頑張るものだ。病兵は一から六までランクづけされており、一と二の重症者は新京の病院に置いて来ているから、ソ連流にいえば軽症者で充分労働に堪え得るといふことだったのであろう。これからどこへ行くのか、当てるのない雪中行軍を続け、日が暮れると雪を掘って TENT を張り、薪を集めて暖をとった。ようやく眠ったと思えばまた出発、そんな行軍が何日か続いた。何人かの脱落者も出たし凍傷患者も続出、死人も出て途中で

埋葬したりもした。

たどり着いたところが山の上に作られた TENT 張りの収容所で、骨組みは木だが、屋根も外壁も TENT でこの寒冷地には全く向かないバラック建て、四六時中ストーブを焚いても寒くていたたまれない建物であった。忘れもしないこの日が昭和二十一年の元旦、今こゝで生きていることを故郷の親に知らせるすべもなく、正月らしいことなどかけられない元旦なのであった。

この建物に五十人ほどの十五、六歳の少年達の先住者があり、皆栄養失調になっていて、「食う物持ってきたの？ 食う物ちょうだい」とねだられて、持ち合わせの物をあげたことがある。どこから連れられてこられたのか、聞く暇もなかったが、こんな子供の非戦闘員まで拉致するなんて本当に許せないと思ったものだし、今でもその思いは消えない。この子供達はいつの間にかこの収容所からいなくなったが、果たして内地へ帰ったものかどうか私にはわからない。

山の上にある建物だから水は一滴もない。雪を溶か

して水を作るのが大変な作業になる。そのうちそりを仕立てて樽で水を汲んで来るようになったが、炊事に使う水と飲料水が精いっぱい、到底洗面、入浴、食器洗いなんで全然できっこなかった。

灯火は、電灯なんて全然なかったが、幸か不幸か石油だけはあったから、缶詰の空き缶にぼろきれの芯を作って明かり取りのランプにした。一棟に三百人も入っているのだから、朝夕の食事時になると一斉にその最も原始的な石油ランプに火がつけられるからもうもうたる煙と石油のにおいが充満した。

みんな栄養失調で、やせこけた顔が真っ黒な面を思わせるほど黒ずんで目だけギラギラしていた。この冬の三カ月間は居住環境も最低、食料も毎日飢餓状態で、死亡者も三人、五人と続けざまにあることが多かった。

シベリアの抑留生活で誰もが言うことは、あの寒さと食事の少なさによる栄養失調である。われわれの収容所も食事は大豆を煮たものや高粱のスープなどで、最初の頃はパンの配給など全くなかった。餓鬼道とは

よく言ったものだが、こうなると見る物見る物みな食い物に見えるし、話も食い物の話に花が咲いた。

危うく発砲されそうになったことがある。数日前から体調が悪かったけれども、医務室にも行かず作業に出たときのこと、下痢気味だった腹がキンと痛み出して便意を催し、ちょっと隊列を離れて用便しようと思った途端、警戒兵はやにわに肩にかけた銃を外して手に持ち銃を構えた。私は隊列に戻りかけながら、とっさにズボンを下ろし、シャツがみ込む暇もなく水のように下痢便をしたから、くだんの警戒兵も納得したようにまた銃を肩にかけて何とか撃たれずにすんだ。国境が近いせいもあったと思うが、逃亡者が多く警戒兵が常にピリピリしていることが多かったから、瞬時も隊列を離れることが許されなかったのである。

私達の部隊は満州各地の関東軍兵士、将校が入隊しているいわゆる寄せ集めの部隊だから、原隊から一貫してシベリアに來た部隊と違って指揮系統もあいまいであり、言ってみれば隣に起居する人間がどここの生まれでどこの部隊かもわからないということが多かつ

た。私から見れば大先輩に見える「下条」という自称下士官が、話しぶりから推察して特務機関出身らしかったが、彼が常に私に言って聞かせたことは、「逃亡しても逃げおさせられるのは一割もないだろう。この収容所を抜け出ても間もなく捕まって銃殺されるか奥地の収容所に送られるか二つに一つと思えばいい。僕も経験があるが、逃げ惑う人間を銃で仕留めるのは猟師が獲物を撃つと同じ感覚で、全然罪悪感なんて感じないものだ」。彼は、でも、この話をするときはものすごく小声で、自分の今までの身分を明かさなために腐心しているかに見えた。身上調査でも出身部隊や氏名まで偽っているらしく、この寄せ集め部隊は隠したいことのある人にとっては格好の部隊であったと言えるかもしれない。

四六時中ストーブを燃やし続けても寒くてたまらなかつたこの幕舎生活も四月までで、その後はこれより少しましな収容所に移動させられ、ささやかな入浴や衣服の熱気消毒などもあるようになった。

風呂があるようになった最初の頃、風呂場の出口に

若いロシア人の看護婦が待ち受けており、局部やわきの毛を剃り落とすのには正直びっくりした。極端に栄養状態が悪いと食気だけで色気が全然なく、若い異性を見ても何も感じなくなっていたから「サオ」をつまんで毛を剃られてもどうということがなかったのである。

いずれにしても、あの青春真つただ中の暗く悲しい三年間は一体何だったのだろうか。不幸にも亡くなつた戦友達、凍てついた大地を掘る力もなくようやく雪を掘って雪の中へ埋葬した戦友達、彼らはまだこの故国の土を踏んでいない。一度かの地に渡って彼らのために線香をと思いがながらも、もうこの年ではそれもかなうべくもないと思う。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年八月一日

入隊 満州第八三六七部隊

収容所 キーゴリナヤ収容所

復員 昭和二十三年六月五日

復員後の職業 花巻市新興製作所勤務の後農業

(岩手県 田辺 壮久)

シベリア抑留の歌

岩手県 及 川 新 蔵

昭和二十年八月九日、ソ連軍は日ソ不可侵条約を一方向的に破棄してソ満国境を越え侵攻、満州（現中国東北部）は戦場のるつぼと化した。当時極度に戦線が拡大し兵員兵器とも不足していた日本軍は惨敗し無条件降伏、武装解除されて捕虜の身となった。

直ちに日本に送還すべき日本軍兵士を、ソ連は帰すと偽りシベリアに連行し、二年から五年、特殊な人は十数年もの長きにわたって強制労働に従事せしめた。特に入ソ当時の食糧、被服、住居環境は劣悪を極め、加えて厳しい寒さと苛酷な労働の強制により、連行された六十数万の一割以上の死亡者が続出、内地帰還後もその後遺症による死亡・疾病は後を絶たなかった。

その死亡者の数の多さは激戦地並みと言われている。

また、ソ連の終戦間際の火事場泥棒的な参戦により当時の在満民間人も多大な打撃を受け、特に老人、婦女子の逃げ惑う様は言葉に言い尽くせない惨状を呈していた。子連れの女は両手に子供の手を引き、背中に乳呑み子を負い、髪を落として丸坊主となり顔に墨を塗ってトボトボと歩く様は何とも言えない地獄絵であり、疲れ果て、子を置き去りにするのを目の当たりに見た我々は、それを救い得なかった無力さを今悔やむのである。逃げるのに足手まといになる老人は家に置き去りにされ、一人ポツネンと寝ていたお婆さんに「兵隊さん、助けて」と懇願されたあの言葉もいまだ耳の奥に残っている。

いたいけな子供たちが残留孤児となり、五十数年経てなお生みの親を捜す姿は涙なしには見られない光景なのだが、しかし当時の戦争の記憶も風化、戦争とは何なのか、一体何だったのか、そして平和の有り難さを語る人達が少なくなった。願わくば稚拙な短歌と短文が戦争のむなしさを思い起こし、平和の有り難さを